

## 海と神の住まう伊勢国

海の博物館 石原義剛

神話の時代のことか歴史時代のことか、私には判りませんが、天照大神が天から下って、伊勢の地に定めるに当たって、「常世」「傍国」「うまし国」だから、ここを宮処にしようと思われた想いは、2000年の歳月を経た今日に生きる人々に引き継がれているのか、そして神話の時代から強い関わりを伝えている海と伊勢神宮の關係に、今日どんな変化があるのか、拙い話しをさせていただきます。

## 「うまし国」

2000年ほど前とされる垂仁天皇25年、ヤマトの地を離れ、垂仁天皇の皇女ヤマトヒメノミコトの案内で、新しい宮地を探し求め、大和、伊賀、近江、美濃、を経巡った末、北から伊勢平野に入り、南下してついに五十鈴川の川上、現在の伊勢神宮内宮の地に、天照大神は宮処を決められました。その時、この地を選んだ理由を、

『伊勢国は常世の浪の敷浪寄する国なり。傍国のうまし国なり。この国に居らんと欲ふ』  
と言われたと「日本書紀」に記されています。

伊勢神宮の神域は志摩半島の真ん中に在ります。伊勢湾の西南海岸背後に広がる広大で肥沃な平野の東端にあたります。伊勢は古代日本の中心であった、難波~河内~飛鳥~大和、から離れた「傍国（かたくに）」です。しかし、三面に海を擁し、一面に大地を持つ志摩半島は、騒乱絶えること無き中心地から離れながら、遠隔地であるわけではありません。

神々の住まいである「常世」へつづく海に取り巻かれ、近くは原生の深い常緑の森に抱かれ、気候は温暖であり清澄な水にも恵まれたこの地に、天より地上に降り立った天照大神は、「うまし国」と満足して鎮まりました。

実に絶妙の地を、天照大神は、ヤマトヒメノミコトにいざなわれて見出したわけです。

万葉集の歌に、大和の香具山で「国見をすれば 国原は煙立ち立つ 海原はかもめ立ち立つ うまし国ぞあきつ嶋 大和の国は」という舒明天皇の歌があります。国中に民の炊飯する煙があちこちに立っている、海ではかもめが悠々と舞っている、なんという素晴らしい国であることかあきつ嶋大和の国は。「うまし国」は、民が平和で豊かに暮らす国に対する感歎の意を表現する最高の言葉として使われています。

伊勢神宮の地は神々にとっても理想郷だと考えられたのでしょう。

その宮地を選び定めるとともに、ヤマトヒメノミコトは天照大神に差上げるお食事である神饌の食材を志摩半島一円に探し求めて、海岸部を歩かれました。太平洋に突き出た半島の先端部、現在の鳥羽市国崎で素潜り漁をする海女の群れに出会い、「おべん」という海女が差し上げたアワビを召しあがったヤマトヒメノミコトはあまりの美味しさに感激されました。以降、国崎の海女はいまもまだ伊勢神宮の神様にアワビを献上しつづけているのです。

国崎のアワビはノシアワビとして献上されます。縄文時代の遺跡からも大量のアワビ殻が出土して、すでに食用にされていたのは明らかで、中国ではアワビが薬用に珍重されており、日本列島でも不老長生の食べ物と認識されていました。良質なタンパク質の貝として今日では高価ですが、古くは流通不便で、海辺を離れると活きたアワビを手に入れることなど出来なかった時代、丸干シアワビやノシアワビは保存食として貴重なものでした。江戸時代には、ノシアワビは伊勢神宮の御師が全国の信者に大麻（お札）に添えて配りました。その名残りはいまもご祝儀袋に留めています。

アワビをはじめタイ、カツオ、イセエビ、ワカメなど豊かな海産物である神饌を産する国として伊勢・志摩は「御食（みけ）つ国」という枕詞を冠して呼ばれています。伊勢神宮に近い海辺の神社には神饌にかかわる、それも海の幸を司る社が多くあります。二見興玉神社（伊勢市二見町）で5月に行なわれる藻刈り神事は、無垢塩

草を採る行事として知られていますが、海藻を海の生命の源と考える古代人の自然観から発しています。この地が夫婦岩の中央から太陽が昇る夏至祭と並んで、海からの伊勢神宮参詣の禊場として大切にされたことが判ります。神饌のなかで特別に扱われているのが塩で、伊勢神宮の塩はすべて二見にある御塩殿で海水から調製されています。

神宮の別宮伊雑宮（志摩市磯部町）のお田植え神事では、田植えの前に、近在の漁業者がサシバ（大団扇）を倒して奪い合う行事があります。その大サシバには米俵を積んで、「太一」と書かれた帆をいっぱい張った船が描かれています。大昔、米が海の彼方から齎されたことを暗示するのでしょうか。

古代から、伊勢湾を含む志摩半島周辺は、季節の新鮮な魚介藻類を、伊勢神宮に献上する海幸豊かな海村でありつづけてきたのですが、近年、海は豊かさを失いつつあります。海洋の汚染もありますが、人々は海への畏敬の念を失いつつあります。海が齎してくれる幸もすべて、人々の腹を満たす産物にすぎなくなり、いつの間にか伊勢国は単なるグルメの「美味し国」に過ぎなくなり、神様の理想の地「うまし国」ではなくなりつつあります。

### 「常世」

「常世」は神様の常住の世界です。それに対し、伊勢国は神様が人間の願いを聞くために住む、地上の国の宮処なのでしょう。人間は認識を持つようになった最初から、死から免れることは出来ないのを知っていたと思います。なぜって人間を創ったイザナギノミコトとイザナミノミコトのお話も、死んだイザナミを黄泉に訪ねたイザナギがウジ虫の湧いたイザナミの屍を見て、死を認め、逃げ帰ることになりますから。しかし、古代の人間も不死は無理でも不老長生は可能と考えていましたから、不老のためのあらゆる試みをしましたし、現在も医者や薬に頼って涙ぐましい努力をしています。

神様の世界とは別に「常世」は人間の死後の魂の行くところ、神様と永遠に同居する世界があると考えていたのではないのでしょうか。死んだ人間の魂は神様といっしょに海の彼方で暮らしていると考えたのではないのでしょうか。

多分、古代人は「常世」は海の中にあると思っていたのでしょうか。なぜなら天照大神の親族はワダツミ 3 神もスミヨシ 3 神もムナカタ 3 神も、みな天照大神の海の兄弟姉妹神なのです。この海の神様はみな今も、とくに海辺に住む人々の厚い信仰を集めています。最近まで昔話の「浦島太郎」も「海幸彦山幸彦」も、ともに海の中にユートピアがあると語り継がれてきました。

志摩半島には、海に向かう「常世」の入り口という思いが古代からあったのではないかと思います。いまも 8 月 31 日、志摩の漁村はどこも藁で作った精霊船に人形（ひとがた）と御供物を乗せて、海の彼方へ流し送る行事があり、お盆に人間世界へ里帰りした祖先様の魂を再び「常世」へ送るのです。常世がいかに理想郷であっても、年に一度くらいは人間臭い世界へ帰って見たいと御先祖様は考えているのではないのでしょうか。

古代人は現代人以上に、不老不死は不可能と知りつつ究極の願望であったに違いありません。中国秦の始皇帝は徐福を不老不死の仙薬を求めに遣わしました。日本の垂仁天皇もタジマモリに「非時の香果（ときじくのかぐのこのみ）」を求めるため常世へ遣わしました。タジマモリがその果実を探しだして帰った時にはすでに天皇は崩御していたのですが、垂仁天皇は天照大神を伊勢神宮に創祀した天皇ですが、彼にも伊勢の地が「常世」の入り口の意識があったのに相違ありません。

伊勢神宮は 20 年に一度、ご遷宮を繰り返しています。衰えた社殿を新しく作り替えることで、再生を図っています。生きとし生きるものは、子孫を生み残すことで再生をはかります。次の世代へ生命を受け渡します。古代人の怖れる死の原因は病気であり自然災害でありました。現代ではさらに戦争死や公害死が加わっていますが。

伊勢神宮は、2000 年（あるいは 1300 年とも）間、天からも、ましてや人間に因っても災厄を齎されることなく不老不死を保っているのであり、このあり方が「常世」そのものと古代人は考え、天照大神すなわち伊勢神宮を崇敬したのではないのでしょうか。

「傍国（かたくに）」

伊勢の地は「傍国」ではありますが、神々の生まれ住まう海の彼方へ向かった国（土地）でした。しかし、決して一国の為政者が中心とする国、仮に呼ぶとすれば「傍国」に対する「本つ国（もとづくに）」には決してならない国でした。「常世」からたえず波の打ち寄せる、この上無い「うまし国」ではあるけれども、傍（かたわ）らの国「傍国」です。海と森と大地のある平穏な「傍国」です。

垂仁天皇の父で御肇国天皇（はつづくにしらすすめらみこと）、はじめてこの国を統治された天皇と言われた崇神天皇の時、民に「流離するもの、反逆するもの」がありました。その頃までは、天皇の御殿に天照大神と倭大国魂神はいっしょに祀られていたのですが、この二神の諍いが民の流離や反逆の原因と考え、祀りの場所を御殿の外に設けようとしたのが、天照大神がヤマトを離れた理由でした。

ちょっと飛躍しますが、天照大神が天皇の住まいを離れて祀られるようになったのは、神人の分離の始まりを意味するのではないのでしょうか。人間が神様から独立しだしたのでしょうか。それまで人間は神の命ずるままであったのですが、この頃から、人間は神を畏れ敬いながらも、必ずしも盲目的に神の命ずるままにはならなくなりました。神なる自然を冷静に知るようになりました。そして祭政の分離がはじまったのでしょうか。

伊勢神宮創始の後に、垂仁天皇の孫ヤマトタケルの東征の話が来ます。東の国々を従わせるため東国へ向かうヤマトタケルは叔母のヤマトヒメノミコトを伊勢神宮に訪ねてクサナギの剣を受けて出発します。これまで日本神話の舞台は九州・日本海―瀬戸内海と移

ってきましたが、ここではじめて舞台は太平洋側に広がります。「傍国」である伊勢から、東国への新たな展開が始まります。しかし、苦闘をつづけ勝利を得たヤマトタケルも最期は傷ついた身体で北伊勢の地で死を迎え白鳥となって「常世」へ還ってゆきます。ヤマトタケルも王者にはなることなく、伊勢の地も都となることはありませんでした。

現代の日本列島には東京、大阪、名古屋、福岡、札幌など「傍国」に対して「本つ国（もとづくに）」とでも呼べばいいのでしょうか、大都会が出現し、ますます巨大都市に肥大化しています。人々はそこに吸引されてゆきます。

第 62 回伊勢神宮ご遷宮の前後して、伊勢を訪れる参詣客は平成 25 年に 1400 万人を数えたそうです。人口比で見ると日本人口 3000 万人の 6 分の 1 におよぶ江戸期のお蔭参り 500 万人まではゆきませんが、大変な人出です。江戸時代のお伊勢参りのほとんどが名も無き無事の民でした。交通至難なあの時代にしかも農民や庶民の参詣がつづいたのは、訪れる人々の心に鬱積を発散させたいなものかがあったのではないのでしょうか。明治維新へのエネルギーを秘めていたのかもしれませんが。現代の参詣者の中に多くの若者の姿があります。この時代に「本つ国」の若者が天照大神を訪れるのはなぜなのでしょう。ただ門前の商店街の賑わいを楽しむためだけではないのでしょうか。

伊勢の地はいまも「傍国」にすぎません。「傍国」にすぎない伊勢とそこに天照大神が鎮座することに、現代を生きる若者をはじめ日本人が、心を安らかにするなにかがあるのでしょうか。「本つ国」である大都会は、今や超高層コンクリート建築の林立する、自然を失った国となりました。人工の快適な暮らしを手に入れた人々がそれを捨てることはできないのでしょうか。しかしまた、自然なる神の子である人間が、永く「本つ国」に住みつづけることができるのでしょうか。その時、「傍国」は変わらぬ天照大神の宮処でありつづけ、人々にとっても「うまし国」であるのでしょうか。